

青年期の友人関係とその両親の夫婦関係の関連
対人葛藤方略に着目して

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
杉 有可

青年期は友人関係が非常に重要な関係になるといえるが、親との関係が希薄になってしまうわけではなく、親との関係の中で揺れ動いている部分もある。また近年、両親の夫婦関係がその子どもの精神的健康に影響するということが明らかにされているが、両親の夫婦関係は子どもの精神的健康だけではなく、友人関係や親子関係とも何らかの関連があるのではないかと考えられる。よって本研究においては、対人関係の具体的な行動の一側面として対人葛藤方略に着目し、青年が自身の友人関係で行う対人葛藤方略とその両親が夫婦間で行う対人葛藤方略との関連、また、両親の夫婦間で行う対人葛藤方略と青年の両親に対する心理的距離との関連を明らかにすることを目的とする。

以上の目的を検討するために、A大学に通う大学・大学院生 220名(男性 83名,女性 134名,不明 3名,平均年齢 21.06歳 ($SD=1.53$))を対象に質問紙調査を実施した。調査時期は2008年12月上旬から中旬であり、回答は無記名で行われ、時間は10~15分であった。質問紙の構成は 対人葛藤方略尺度(加藤,2003)20項目,4件法(青年自身,父親,母親についてそれぞれ回答を求めた) 心理的距離尺度(金子,1989)10項目,5件法(父親,母親についてそれぞれ回答を求めた)であった。

まず最初に、クラスター分析を用いて夫婦間での対人葛藤方略の類型化を行ったところ、4つのクラスターが得られ、それぞれのクラスターを「低解決群」、「母衝突回避群」、「妥協解決群」、「母強制群」と命名した。次に、上記で得られた夫婦間における対人葛藤方略の4つの群を独立変数、青年の対人葛藤方略尺度の下位尺度を従属変数として1要因4水準の分散分析を行った。その結果、群によって用いる対人葛藤方略に差があることが明らかになった。最後に、上記で得られた夫婦間における対人葛藤方略の4つの群を独立変数、青年の両親それぞれに対する心理的距離尺度を従属変数として1要因4水準の分散分析を行った。その結果、群によって両親に対する心理的距離に差があることが明らかになった。

以上より、青年の友人関係における対人葛藤方略とその両親の夫婦間における対人葛藤方略との関連が明らかになり、青年は、両親が夫婦間で行っている対人葛藤方略と同じ対人葛藤方略を自身の友人関係において用いている部分があるのではないかとということが示唆された。また、両親の夫婦間における対人葛藤方略と青年の両親に対する心理的距離との関連が明らかになり、両親の夫婦関係に対する認識が、両親に対する心理的距離に何らかの影響を与えているのではないかとということが示唆された。